

Information 2022 青少年赤十字指導情報



特集 1 日本赤十字社 青少年赤十字100年の歩み

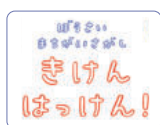
特集 2 100周年 全国の活動の見える化



100周年に寄せてメッセージ

全国青少年赤十字賛助奉仕団協議会
会長 藤田 伸朔

岡崎市教育委員会 学校指導課指導研修係
係長 浅井 貞人 (前 岡崎市立矢作中学校教諭)



PAGE		
1	目次／赤十字活動と SDGs ほか	17
2	巻頭言 コロナ禍における子どもの「気づき、考え、実行する」 青少年赤十字全国指導者協議会 会長 滋賀県守山市立守山小学校長 田中 滋規	18
3	特集1： 日本赤十字社 青少年赤十字 100 年の歩み	21
7	特集2： 100 周年全国の活動の見える化	22
9	100 周年に寄せてメッセージ 全国青少年赤十字賛助奉仕団協議会 会長 藤田 伸朔 岡崎市教育委員会 学校指導課指導研修係 係長 浅井 貞人 (前 岡崎市立矢作中学校教諭)	
10	経過報告 青少年赤十字 海外支援事業 (IYCP)	
11	道徳教育と青少年赤十字の関わり やさしいところを見つけよう	
15	青少年赤十字のオンライン活動	



**Junior Red Cross
Information 2022**
2022.4.1 No.170
青少年赤十字指導情報



※本誌の内容は、原則として 2022 年 3 月 31 日時点のものです。

■ 持続可能な開発目標(SDGs)とは？

SDGsとは、2001年に策定されたミレニアム開発目標(MDGs)の後継として、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2016年から2030年までの国際目標です。

■ 赤十字活動とSDGs

国際社会全体の開発目標であるSDGsの策定には、国際赤十字も深く関与しており、赤十字では目標の達成にも貢献しています。そのため、今回の指導情報で取り上げる青少年赤十字活動において関連性の高い目標をそれぞれ掲載しました。

■ SDGs 17の目標

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1 貧困をなくそう | 10 人や国の不平等をなくそう |
| 2 飢餓をゼロに | 11 住み続けられるまちづくりを |
| 3 すべての人に健康と福祉を | 12 つくる責任つかう責任 |
| 4 質の高い教育をみんなに | 13 気候変動に具体的な対策を |
| 5 ジェンダー平等を実現しよう | 14 海の豊かさを守ろう |
| 6 安全な水とトイレを世界中に | 15 陸の豊かさを守ろう |
| 7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに | 16 平和と公正をすべての人に |
| 8 働きがいも経済成長も | 17 パートナリーシップで目標を達成しよう |
| 9 産業と技術革新の基盤をつくろう | |



日本赤十字社は持続可能な開発目標(SDGs)に貢献しています。

コロナ禍における子どもの 「気づき、考え、実行する」

青少年赤十字全国指導者協議会 会長
滋賀県守山市立守山小学校長

田中 滋規



「コロナ禍」という言葉を、この2年間で何回書いたり話したりしたことでしょう。学校現場では、毎日感染予防に四苦八苦しています。行事の中止・内容変更のみならず、授業形態そのものの変更も余儀なくされています。しかしながら、目の前の子どもたちは日々成長しており、「旬の時に旬のことを学ばせる」必要があり、「コロナが収まってから学ばせれば良い」というものではありません。学びに適切な時期を逃したら、取り返しがつかないのです。こう考えると、教育界のコロナ禍は、いつしか感染拡大が収まり、世の中が平穏に戻った後に新たに始まるのではないかと危惧しています。

さて、暗い話からさせていただきましたが、このような制限のある学校生活の中でも、本校の子どもたちは現状に応じ、青少年赤十字の態度目標であり、本校の教育目標を具現化した合言葉である「気づき、考え、実行する」に沿った活動を見せてくれます。その中の例を、少し紹介します。

年に2回、異学年の子ども同士が遊びを通して交流する「縦割り遊び」。どんな遊びを計画するかは、各学級の話し合いに委ねられています。以前なら「小さな学年の子でも楽しめる遊び」や「顔と名前を覚えられるような遊び」という観点が遊び選びのポイントでした。しかし、今では「接触しない遊び」「密集しない遊び」「大声を出さない遊び」というポイントから話し合いが進み、それ相応の遊びを考え出して実行しています。また昨年度の「委員会祭り」と呼ばれる集会で各委員会が迷路やクイズといったコーナー展示をした際には、待っている人が密集するのを防ぐために床に待機線を引いたり、一度にゲームに参加できる人数を数えて制限したり、使用した器具を直ぐに子どもらが消毒したりといった動きがみられました。さらには、給食のメニューに

魚の「ぶり」が登場した時に、「ぶりは体長1mくらいです」というメニュー紹介の放送を聞いたある委員会が、ちょうど運動会が近かったこともあり1mの「ぶり」の模型をいくつか作成して、運動会当日にその模型をプラカードにして「たっぷり距離をとろう」「隣とぶり2匹分(2m)の間隔を空けよう」と呼びかけるという子どもらしい発想も見られました。

ここに挙げた一例は、児童がコロナ禍の現状に対して、自ら「気づき・考え・実行」した証です。そう考えると、「制限・我慢」を強いられている学校生活の中でも、子どもなりにたくましく育っている一面がみられてうれしく思います。

当初は、世間は「コロナと戦え」「コロナに負けるな」「我慢して乗り越えよう」というキャッチフレーズに満ち溢れていました。しかし、昨今は「With コロナ」「コロナと共存」「新しい生活様式」等、勝ち負けではなく現状を見据え、その中でどう価値のある自分らしい生活・生き方をしていくかに考えがシフトしています。こんな時期だからこそ、現状に「気づき・考え・実行する」子どもの育成が重要であり、青少年赤十字の活動、精神の意義が問われる時になっているのではないかと感じます。

折しも、本校は今年青少年赤十字発祥100周年を迎えます。コロナ感染拡大が収まることを願いつつ、「気づき・考え・実行する」本校の子どもたちの活動の成果をみなさんに発信できるよう、引き続き青少年赤十字活動を進めてまいります。





Junior Red Cross 100th Anniversary

日本赤十字社 青少年赤十字 100年の歩み

大正3年

1914

- 第一次世界大戦始まる (1914年)

大正9年

1920

- ベルサイユ条約調印 (1919年)

- ロシア革命 (1917年)

大正14年

1925

- 関東大震災 (1923年)

昭和4年

1930

- 満州事変 (1931年)
- 第二次世界大戦始まる (1939年)

- 世界恐慌 (1929年)
- 二・二六事件 (1936年)

【JRCの動き】

▶1914(大正3)年～

第一次世界大戦をきっかけにカナダやアメリカ、オーストラリア、イタリアで青少年赤十字が結成される

▶1920(大正9)年

第1回赤十字社連盟総会で事業の方向性を示す決議が採択

「すべての赤十字社は赤十字事業のためにその国の少年を養成すべし」

▶1921(大正10)年

日本赤十字社本部規則が改正され、所管事項に「少年赤十字」が加わる

▶1922(大正11)年

滋賀県守山市立守山小学校(当時、野州郡守山尋常高等小学校)で国内初の少年赤十字団を結成



少年赤十字団旗



守山小学校での国内初の少年赤十字結団式

▶1922(大正11)年

赤十字社連盟第2回総会で目的・組織形態を決議

▶1926(大正15)年

雑誌「少年赤十字」創刊



雑誌「少年赤十字」(1927年4月号)
表紙絵は岡本帰一。執筆陣には村岡花子、巖谷小波の名も

コラム① 第一次世界大戦と少年赤十字

第一次世界大戦中、各国の赤十字社の協力によりカナダやアメリカ、オーストラリアなどの児童・生徒が、それぞれの赤十字社を通じて兵士やその家族に慰問品等を送る活動を行いました。それが青少年赤十字活動の先駆けとされています。1920(大正9)年にジュネーブで開かれた第1回赤十字社連盟総会で「少年を養成すべし」と決議。1922(大正11)年の第2回連盟総会において「少年赤十字」の目的や組織形態が決まりました。同年、国内で最初の少年赤十字団が滋賀県の守山小学校で結成され、以降、加盟校が全国で増えていきました。



第一次世界大戦時、前線の兵士のために靴下を編むオーストラリアの公立小学校の生徒たちと教員
NSW State Archives 所蔵

コラム② アメリカ赤十字社からの贈りもの

第一次世界大戦を契機に始まった青少年赤十字活動。アメリカ青少年赤十字はその後さまざまな活動によって戦争で疲弊したヨーロッパの児童のための支援を行い、これが大きな反響を呼び、国際的な青少年赤十字の発展のきっかけとなりました。その後、交流が活発化しました。写真はアメリカ赤十字社から日本赤十字社に贈られた救急キットです。ふたの裏側には「School Box」とあり、1921年の発行年が記された教本も添えられています。



※赤十字WEBミュージアムより

第一次世界大戦終結後の1922(大正11)年、滋賀県守山市立守山小学校で少年赤十字団が結成され、日本で
の青少年赤十字活動がスタートしました。それから100年、日本赤十字社の青少年赤十字活動の歩みを、
時代の移り変わりの中で振り返ってみます。

昭和20年

1945

●第二次世界大戦終結
(1945年)

●戦後の学制改革
(1947年)

●日本国憲法公布
(1946年)

昭和25年

1950

●朝鮮戦争始まる
(1950年)

●サンフランシスコ講和条約
(1951年)

昭和35年

1960

●日本、国際連合に加盟
(1956年)

●東京オリンピック開催
(1964年)



▶1947(昭和22)年

アメリカ赤十字社から、オードレイ・
H・バセットが本社青少年赤十字課の
専属顧問として着任

▶1948(昭和23)年

第1回トレーニング・センター開催
(神奈川・岡山)

▶1954(昭和29)年

在日アメリカン・スクールの青少年団員との
日米トレーニング・センターを開催



1950(昭和25)年、滋賀県大津市雄琴小学校で行ったトレーニング・センター

▶1956(昭和31)年

トレーニング・センター指導者
養成講習会 開始

▶1956(昭和31)年

第1回青少年赤十字中央
講師養成講習 開催

▶1957(昭和32)年

青少年赤十字第1回スタディー・
センター 開催



▶1962(昭和37)年

指導主事対象青少年赤十字
研究会 開始

▶1964(昭和39)年

青少年赤十字賛助会(現在の全国青少年赤十
字賛助奉仕団協議会)発足



1965(昭和40)年、高校生トレーニング・センター



1979(昭和54)年、中学校・高校メンバートレーニング・
センター

コラム③

ヨーロッパでも評価された感染症 予防啓発ポスター

日本赤十字社は、感染症の流行に際して、治療だけでなくポ
スターや刊行物による啓発活動にも力を入れてきました。

「咳やくしゃみをするときは
ハンケチで口鼻をおさへませ
う」というシンプルなメッ
セージを打ち出したこのポス
ターは、大正末期から昭和初
期にかけて子どもたち向けの
公衆衛生の教育ツールとして
作成されたものの一つで、
ヨーロッパでも高く評価され
ました。



コラム④

国内での「青少年赤十字の広がり」

1922(大正11)年に滋賀県・守山小学校少年赤十字団が結成
されて以降、全国に順次加盟校が増えていきました。第二次
世界大戦後は、アメリカ赤十字の顧問団の支援により、新し
い学校制度のもとで再出発。令和3年現在の加盟校は14,502
校(幼稚園、保育所、小中高、特別支援学校含む)。奉仕活動、
老人ホームの訪問、国際交流・親善、リーダーシップ・トレ
ーニング・センター(リーダーシップの養成を目的とした集合研
修)などの多彩な青少年赤十字活動を通じて、赤十字の精神
は大きな広がりを見せています。





Junior Red Cross 100th Anniversary

日本赤十字社 青少年赤十字 100年の歩み

昭和45年

1970

昭和55年

1980

平成2年

1990

平成12年

2000

平成22年

2010

●大阪万博開催 (1970年) ●ベトナム戦争終結 (1975年)

●湾岸戦争 (1991年)

●東日本大震災 (2011年)

●イラン・イラク戦争 (1980年)

●阪神・淡路大震災 (1995年)

●オイルショック (1973年) ●アフガン侵攻始まる (1979年)

●アメリカ同時多発テロ (2001年)

●東欧革命・ベルリンの壁崩壊 (1989年)

【JRCの動き】

▶1970(昭和45)年

東南アジア汎太平洋地域
青少年赤十字国際セミナー
(こんにちは'70)を日本で開催



▶1971(昭和46)年

青少年赤十字中央審議会を設置、
青少年赤十字の振興を推進

▶1984(昭和59)年

ネパール支援のため
「一円玉募金」活用開始



▶1990(平成2)年

「青少年赤十字健康
安全プログラム」を設定

▶1993(平成5)年

青少年赤十字・赤十字奉仕団
全国交流集会「はじめての一步」開催

▶1995(平成7)年

全国の青少年赤十字加盟校が阪神・淡路
大震災のための募金活動などを展開

▶1997(平成9)年

教師のための国際人道法ガイドブック作成

▶1998(平成10)年

青少年赤十字創設75周年・赤十字奉仕団
創設50年の記念事業開催

▶2015(平成27)年

青少年赤十字防災教育プログラム
「まもるいのち ひろめるぼうさい」
(小・中・高校生向け)発行



まもるいのち ひろめるぼうさい
(小・中・高校生向け)

コラム⑤ リーダーシップ・トレーニング・センター

リーダーシップ・トレーニング・センター(トレセン)は、赤十字・青少年赤十字活動への理解を深めると共に、集団生活の中でリーダーとして必要な資質を身に付ける青少年赤十字の中で最も特徴のある教育プログラムのひとつ。戦後まもない1948(昭和23)年に第1回トレセンが北は神奈川県、南は岡山県に、全国から参加者が集い開催されました。現在も各都道府県の青少年赤十字活動が毎年夏休み期間等を利用して行われています。「気づき・考え・実行する」主体性のあるリーダーシップの育成を図っています。



コラム⑥ 「一円玉募金」と海外支援事業の歩み

お小遣いを節約して、世界中の苦しんでいる同世代の子どもたちのために募金活動をする事で「奉仕」の心を学び、「国際理解・親善」を図る。それが青少年赤十字の「一円玉募金」です。集めた募金を、支援対象国で本当に必要な形で活用してもらえるよう、現地赤十字の人々などと話し合っ使い道を決めることが大きな特色です。高校生メンバーが現地で募金がどのように使われているかを見聞することを通して、将来につなげる学びの機会とする「平成30年度青少年赤十字海外支援事業スタディーツアー」を実施しました。 ※詳しくは卒業生メッセージ(P.21)を確認ください。



経済の高度成長が続く1970年以降、環境や医療・福祉の問題など、赤十字として取り組むべき課題が新たに生まれました。日本各地で災害が起こり、新型コロナウイルス感染症の影響がある中、様々な活動を継続してきました。

令和元年

2019

●西日本豪雨(2018年)

●新型コロナウイルス感染症の流行(2020年～)

●熊本地震(2016年)

令和4年

2022

▶2018(平成30)年

「ぼうさいまちがいさがし

きけんはっけん!」(幼稚園・保育所向け)発行



▶2022(令和4)年

青少年赤十字創設100周年

▶2020(令和2)年

「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう」制作
オンラインによる国際交流集会や、スタディー・プログラムを実施



学校の授業や文部科学省の教材に活用された「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう」

▶2021(令和3)年

青少年赤十字創設100周年直前
令和3年度スタディー・プログラムを開催



コラム⑦

赤十字WEBミュージアムで 青少年赤十字の特別企画展

2021年10月にオープンした「赤十字WEBミュージアム」は〈所蔵品紹介〉〈赤十字ヒストリー〉〈特別企画〉の3つの入口から赤十字の歩みを見ることができるオンライン博物館です。〈特別企画〉の第1弾は「感染症と赤十字～治療と予防の歴史～」。

新学期を迎える4月からの第2弾企画は「青少年赤十字」を予定。指導者の方々は必見です!



<https://www.jrc.or.jp/webmuseum/>

日本赤十字社 長期ビジョン

目指す姿と長期戦略～創立150年に向けて～

日本赤十字社は、2027年5月1日の創立150年に向けて、時代と共に変化するこれからの社会課題やニーズに柔軟に対応し、赤十字としての使命を果たし続けていくために、将来目指す姿やそれを実現するための長期戦略、行動指針等を示した「日本赤十字社長期ビジョン」を策定しました。

「日本赤十字社 長期ビジョン」全体像

日本赤十字社が取り組む社会課題

- 災害や紛争から人々が守られる社会づくり
- 人々の健康・福祉を支える地域づくり
- 互いを思いやり、助け合い、尊重し合う社会づくり

目指す姿

国内外における人道支援活動の「要」となり、 わが国の地域医療・血液事業の中核を担う赤十字

とりわけ青少年赤十字では、多様化が進む社会における人道の輪の拡大に取り組み、多様な価値観が誕生し「互いに尊重し、助け合う」社会を目指します。

豊かな心をもった青少年の育成強化

- これからの教育現場のニーズに即した「青少年赤十字」活動の再編
- 「不登校」や「いじめ」等の学校が抱える問題解決の一助となる人道教育の展開
- 地域社会とのつながりを体感できる新たな「青少年赤十字」活動の導入

青少年赤十字創設100周年を記念した SNS企画参加者募集中!

#JRC100th 検索

青少年赤十字は、「青少年赤十字創設100周年SNS企画」として、2022年1月から同年12月まで、公式インスタグラムで写真や動画の投稿を募集しています。

- ▶ #気づき考え実行する
- ▶ #7原則
- ▶ #健康安全
- ▶ #私の考える青少年赤十字
- ▶ #奉仕
- ▶ #赤十字ゆかりの地
- ▶ #国際理解親善

テーマは上記の通りで、動画と写真どちらでも投稿可能です。青少年赤十字加盟校のメンバー、青少年赤十字指導者(青少年赤十字賛助奉仕団を含む)、青少年赤十字関係者なら、誰でも参加できます(※未成年の場合は保護者の同意が必要)。参加にあたってはホームページで参加要項をご覧ください。

また、「#JRC100th」で検索し、投稿に対して、「♡いいね!」やコメント、シェア等でリアクションすることもできます。

地域に根差した全国の青少年赤十字メンバーの日々の活動や青少年赤十字への想いを「見える化」できる場として是非ご活用ください。

まずは公式アカウント
「juniorredcross_tsc_japan」を
フォロー!



2022年 ダンス

メンバーの皆さんが参加できる
ダンス企画を準備中
インスタグラムやホームページ
で最新情報をチェック!



100周年全国の活動の見える化

青少年赤十字は2022年に創設100年を迎えました。スローガン「未来のあなたへ、やさしさを。」を掲げ、100周年事業として地域に根差した活動を全国で展開しています。100周年グッズは、のぼり、ロールアップバナー、缶バッジ、シール、寄せ書き旗やパネル等があります。青少年赤十字加盟校や全国の支部を中心に、賛助奉仕団や地域のボランティアの方々と連携して行う、13の活動メニューをご紹介します。



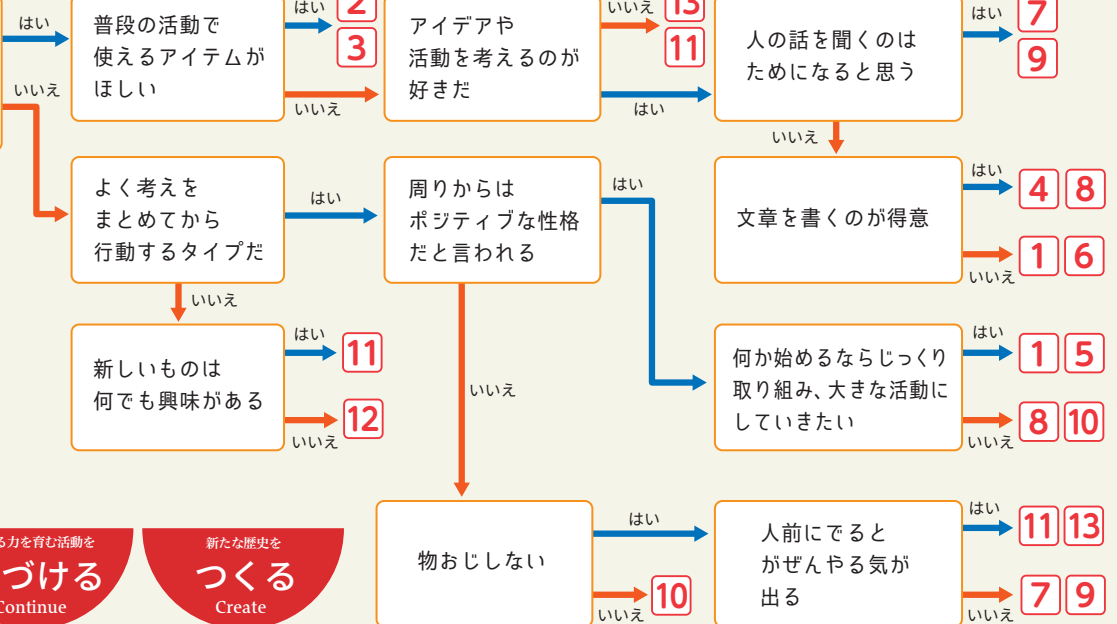
● あなたは何から始める？ 13の活動

はい → いいえ →

Start

日々の赤十字活動は充実した取組ができていると思う

青少年赤十字創設100周年の取り組みには、あなたの活動を、「つなぐ」「つづける」「つくる」ための13の活動メニューがあります。日々の青少年赤十字活動以外にどんなことをすればよいのだろう、と考えてしまうかもしれませんが心配ありません。チャートを試してみれば、あなたに合った気軽に始められる活動メニューがきっと見つかります。



子どもたちの絆・思い・活動を **つなぐ** Connect
 生きる力を育む活動を **つづける** Continue
 新たな歴史を **つくる** Create

青少年赤十字創設100周年事業の活動紹介

日本赤十字社都道府県各支部で行われている100周年事業の活動のうち、代表事例のいくつかをご紹介します。

■ 秋田県支部

100周年を記念し、奉仕団と加盟校の生徒がアームカバー作りでコラボレーションを実施(活動⑥)。



■ 大阪府支部

周年事業の準備として、大阪赤十字会館で「青少年赤十字100周年事業実行委員会」を開催(活動⑤)。



■ 山口県支部

100周年記念の航空写真で人文字をドローンで撮影(活動⑤)。



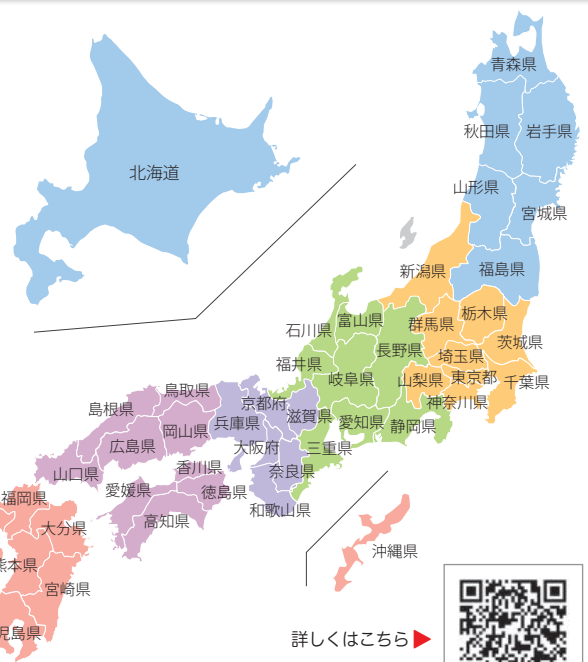
■ 三重県支部

100周年を記念し、実践目標をテーマとしたポスターコンクールを開催(活動⑥)。



■ 広島県支部

広島県内の児童・生徒達で100万羽おりづるプロジェクトを実施中(活動⑥)。



詳しくはこちら ▶



※今後も様々な特色ある100周年活動が実施されますので、詳しくはHP等でご確認ください。

1 実践目標ごとの統一運動 つづける

ブロック内や県内で実践目標ごとの活動を計画し実行してみましょう。活動している写真をホームページやSNSに「#JRC100th」をつけて掲載してみましょう。実践目標をもとに活動をつづけましょう。



2 のぼり/バナーを加盟校に掲げる つなぐ

青少年赤十字活動の際はのぼりやバナーを掲げてみましょう。活動している写真をホームページやSNSに「#JRC100th」をつけて掲載してみましょう。青少年赤十字活動の見える化し、全国でつながりましょう。



3 バッジの着用 つなぐ

青少年赤十字バッジや100周年記念バッジを着けてみましょう。同じものを着用することで、全国のメンバーとつながりましょう。



4 手紙等を送り優しさについて考える活動 つくる

青少年赤十字創設100周年のスローガン「未来のあなたへ、やさしさを。」について考え「あなた」へ手紙をおくってみましょう。手紙の相手「あなた」は、家族・お友達・先生・未来の自分であったり、自由に選びましょう。手紙の一部や活動を写真にとりホームページやSNSに「#JRC100th」をつけて掲載してみましょう。



5 周年記念展示会・イベント等の実施 つくる

青少年赤十字創設100周年をお祝いする周年記念展示会やイベント等に参加してみましょう。青少年赤十字メンバーの皆さまが工夫してイベントを計画し実行してみるのも良いでしょう。新たな歴史をつくっていくのは、あなたです。活動している写真をホームページやSNSに「#JRC100th」をつけて掲載してみましょう。



賛助奉仕団員と支部職員が協力し、看板プレート加盟校に貼付する活動を実施中（長崎県支部）。

6 青少年赤十字活動の見える化 つくる

青少年赤十字活動として日々行う活動の見える化する場をつくってみましょう。ハッシュタグ「#JRC100th」を検索し、全国のメンバーが行う活動を知りましょう。良いなと思った投稿に、「いいね!」や「コメント」をつけてリアクションしてみましょう。自分たちが活動する写真をホームページやSNSに「#JRC100th」をつけて投稿する記事をつくってみましょう。



7 青少年赤十字活動の経験がある日赤職員が講演 つづける

青少年赤十字経験のある日赤職員から話を聞いてみましょう。講演を聞きながら、未来の自分を想像してみましょう。今自分たちが行っている活動をつづけると、将来どのように役立つか考えてみましょう。



8 都道府県各支部にある寄せ書き旗に想いを記す つなぐ

青少年赤十字100周年の旗へ寄せ書きをしてみましょう。県内や全国の青少年赤十字メンバーや指導者等関係者が一斉に想いをつなぎます。記載する内容は優しさあふれる「あなた」へのメッセージや、未来へのメッセージ、目標など自由に選ぶことができます。各県や学校で決めて実行してみましょう。



9 賛助奉仕団とのコラボ教養子との対談 つなぐ

青少年赤十字賛助奉仕団とのコラボイベントに参加してみましょう。話を聞きながら、過去と未来の自分を想像してみましょう。青少年赤十字の活動がずっとつながっていることを知りましょう。賛助奉仕団会長のメッセージはP9をチェック!



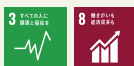
10 「青少年赤十字創設100周年」を付け事業を実施 つづける

「青少年赤十字創設100周年」をつけることで、様々な工夫を行い、歴史を深く知り、未来を想い、今の活動に取り組みましょう。地域に根差した活動がつづいていることを知りましょう。



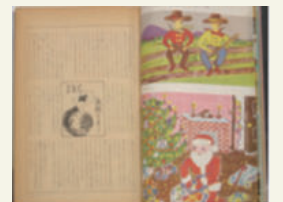
11 SNS企画 つづける

青少年赤十字創設100周年に公開された公式Instagram(アカウント: juniorredcross_tsc_japan)をフォローしSNS企画に応募してみましょう。



12 青少年赤十字の古いグッズ集め つづける

青少年赤十字創設100周年を記念に、青少年赤十字に関する古いグッズを集めてみましょう。家族や親せき、知り合いが青少年赤十字の経験者かもしれません。経験者からお話を聞くことや活動に参加することで、青少年赤十字への理解が深まります。許可をとりグッズを写真にとり、ホームページやSNSに「#JRC100th」をつけて投稿してみましょう。青少年赤十字の活動が昔からつづいていることを知りましょう。



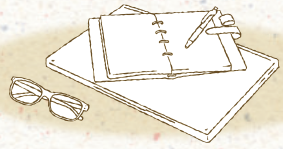
13 メッセージ「私の考える青少年赤十字」 つなぐ

これまでの青少年赤十字活動を振り返ってみましょう。「私の考える青少年赤十字」を紙に書いてみましょう。他のメンバーと意見を交換してみましょう。写真や動画にとり、ホームページやSNSに「#JRC100th」をつけて投稿してみましょう。



100周年に寄せてメッセージ

青少年赤十字創設100周年にあたり、さまざまな方面からお祝いの言葉をいただいています。ここではお二方のメッセージをご紹介します。



青少年赤十字 創設100周年に寄せて

全国青少年赤十字賛助奉仕団協議会
会長 藤田 伸朔



創設100周年、おめでとうございます。

賛助奉仕団員の多くは、長い間、学校現場の青少年赤十字の指導者として活躍した仲間です。当時を振り返り、感慨深いものがあります。

私は青少年赤十字全国指導者協議会の会長として、1998年10月に開かれた青少年赤十字創設75周年記念「国際交流集会」に参加し、そこで戸惑いと、強い衝撃を受けました。学校経営の忙しさを理由に青少年赤十字と真剣に向き合っていないことが、気づき、資料を読み、子どもを見つめ、教師たちと話し合い、実践する日々を重ねていました。

退職後、当然のように青少年赤十字賛助奉仕団(当時賛助会)

に加入しました。現職でやりきることができなかった思いと、青少年赤十字の魅力にひかれたからに違いないのです。

現在、全国の青少年赤十字賛助奉仕団員数は、3,700名を数えています。

発足は1964年です。全国青少年赤十字賛助奉仕団協議会の信条は、1988年に制定されました。

- 1 青少年赤十字の充実発展に協力奉仕する。
- 1 赤十字思想に普及啓発に努め、平和な社会に実現に寄与する。
- 1 志を同じくする人々と手を取り合い研鑽に努める。

全国の都道府県で組織され、地域に即した活動をおこなっています。さまざまな悩みや課題を抱えながらも、青少年赤十字を応援したいという信条のもとにあるのです。その信条を支えているのは、『指導理念のすばらしさ』にあると考えます。実践を通して子どもたちの姿の中に体感した経験を共有しているからです。

100周年を機に、青少年赤十字の関係者と連携をはかりながら、持続可能な支援ができることを願っています。

石川選手を育ててくれた 青少年赤十字の態度目標 「気づき、考え、実行する」

岡崎市教育委員会
学校指導課指導研修係 係長 浅井 貞人
(前 岡崎市立矢作中学校教諭)



私は、青少年赤十字加盟校の岡崎市立矢作中学校に2002年から2010年まで9年間勤務していました。体育の授業を担当したほか、バレー部の顧問として活動していました。矢作中学校では当時、青少年赤十字の活動としてアルミ缶回収などのリサイクル活動を全生徒参加で行い、また、生徒会を中心とした生徒が隣接する高齢者養護施設へ出向き、ゲームや本の読み聞かせなどを定期的に行っていました。学級担任をしていた私も活動によく参加していました。

2008年頃、バレー部に入部した1年生の中に、東京オリンピック2020で活躍した石川祐希選手がいました。石川選手は、ずば抜けた運動神経があり、また、とても優しい心の持ち主でした。バレー部ではキャプテンを務めていたのですが、常にチーム全体に気を配り、コミュニケーションをとるよう心掛けていたようで、試合中に仲間がミスをするとう「次に集中！」などと声掛けすることでチームを盛り上げていました。

全国大会などで挨拶する際、彼は今まで支えてくれた両親や兄弟、教師や友人に対しての感謝を口にしていました。昨年、新型コロナウイルス感染症の拡大でオリンピック開催が危ぶまれていた時期に、石川選手は日本全国の小中高生に向けて「今、あなたが伝えたい『感謝の気持ち』」を募集し、自身のインスタグラム・公式アカウントに掲載する活動を行ったそうですが、これなども彼らしい行動だと思います。

青少年赤十字の態度目標に「気づき、考え、実行する」がありますが、私はバレー部の部員たちにこの言葉の重要性を伝えてきました。気づく目と行動力を身につければ、試合中でも相手を冷静に観察できるようになり、自分のプレーに活かすことができるようになるかと指導してきました。

中学時代の石川選手の態度を思い出してみると、私の言っていたことを理解し常に意識において日常生活を過ごしてくれていたのではないかと感じるがあります。

また、「気づき、考え、実行する」は、私にとっても大切な言葉です。顧問になったばかりの頃の私は、技術や戦術を手取り足取り教えることに熱心でした。一度大会で大負けしたことがあり、そのとき相手チームの選手が常に会話していることに気づき、このままではいけないと思いました。自分たちで考え、話し合っ試合に臨めるチームにしようと指導方針を変えたところ、良い結果が出せるようになりました。

青少年赤十字の態度目標や活動が、学年を問わずどのような場面でも活用できる素晴らしいものであることを私は身をもって経験しています。未来を生きていく子どもたちにとり、これからの時代は自分で考え選択することが一層問われるようになります。私たちはこれからも青少年赤十字を応援していきます。

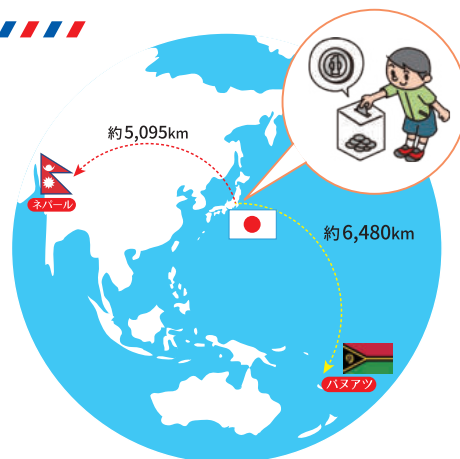
創設100周年、本当におめでとうございます。



経過報告 青少年赤十字海外支援事業 (IYCP)

～子どもたちが集めた募金を活用して途上国の子どもたちへ思いやりを～

「青少年赤十字海外支援事業 (International Youth Cooperation Project (IYCP))」は、日本の青少年赤十字メンバーの奉仕の精神を醸成して、対象国の赤十字・赤新月社の子どもの健康・安全の確保を図り、国際理解・親善を推進することを目的としています。ネパールとバヌアツを対象に、2017年から2019年の3年間、支援を行ってきました。さらなる支援が必要とされたため、第2次3カ年事業を2020年7月から開始しました。これまでの活動を報告します。



ネパール 持続可能な水と衛生環境を つくる教育事業



ネパールは、2015年に発生した大地震の影響もあり、全国で衛生環境が悪化し、手洗い場の減少、感染症の流行が確認されています。子どもたちが衛生的な行動を身につける知識と技術を得て、家庭やコミュニティに普及すること等を目的に、ネパール赤十字社と協力し支援を実施しています。

対象の地域はシャンジャ郡とパルバト郡の学校と隣接する地域です。

新型コロナウイルス感染症の拡大はネパールでも大きな影響を及ぼしており、ネパール赤十字社の全スタッフが感染防止への対応に動員されることとなりました。そうした状況下であっても、衛生の危険性に関する情報伝達、適切な手洗いの方法など衛生に関する行動変化、個人の衛生状態改善を目的とした活動を続けています。

具体的には、生徒たちがより衛生的な行動を身に着けられるよう、120名を対象にしたIYCP説明会、156名を対象にした新型コロナウイルス感染症予防のオリエンテーションを実施しました。

また、コミュニティ全体で衛生改善に取り組むためにも活動しました。衛生パンフレットや個人防護用セットを配布、みんなが使える公共の手洗い場を7カ所設置、手洗い啓発ポスターの掲示、さらに協力してくれるボランティア178名を集めました。2023年6月までに事業の目的を達成するため、活動を継続していきます。



バヌアツ 災害へ備える防災 教育事業



バヌアツは地震や津波、洪水、火山噴火など様々な災害の危険にさらされている国です。しかし、教育機関における防災教育は不十分で、生徒は防災や災害時の対応についての知識を持たない状況にあります。本事業はバヌアツ国内すべての学校で防災の授業をカリキュラムに統合し、災害への備えを強化することを目的としています。

バヌアツ赤十字社が主体となる本事業で、防災に関して生徒、教員や学校委員会のメンバーの意識改善を図るため、様々な取り組みを行いました。

例えば、州教育事務所や16の対象校とのパートナーシップを強化し、ユースボランティアによるピアエデュケーション (同じ立場の仲間どうしによって行われる共同作業) や学校を拠点とした地域での研修、全国的なキャンペーンなどを通して防災教育を実施しました。

また、2016年10月に噴火したヤスール火山の近くにある3つの学校を対象に、防災教育を実施しました。はじめに教

師、学校委員会のメンバー、赤十字職員やボランティアを対象に防災、減災、準備、対応、レジリエンス (復興)、リハビリテーションを含む防災研修を行い、小・中学校のカリキュラムの一部として、児童生徒と家族等の意識と理解を深めるための取り組みを進めました。

さらには、ユースボランティアはネットワークを強化し、災害弱者の生活改善についての取り組みを行いました。バヌアツ赤十字社は本事業を通じて100人以上のユースボランティアを採用し、研修を実施した結果、4つの州でユースクラブを設立しました。それにより、災害による被災者の減少が期待できます。



道徳教育と青少年赤十字の関わり

やさしいところをみつけよう

いじめや不登校は学校現場において大きな問題となっています。こうした課題へアプローチできる教科として「道徳」が挙げられるでしょう。そして「道徳」の考え方は、青少年赤十字の目標と一致するところがあります。日本赤十字社や青少年赤十字活動の事例を通して、いじめや不登校が起きにくい環境を整える取り組みである、青少年赤十字活動の有用性について紹介します。

事例01 青少年赤十字指導者中央講習会 本社(東京都)

いじめ防止プログラムの年間計画

日本赤十字社本社で、2019年11月23日(土)に「いじめと不登校」をテーマに「青少年赤十字指導者中央講習会」を開催し、各都道府県の指導者が参加しました。

まず、日本赤十字国際人道研究センターの角田敦彦副所長が登壇し、人間の安全保障と「いじめ」の関連性などについて解説しました。そのなかで、「いじめ」は学校特有の問題ではなく人間の尊厳にかかわる社会的な問題であると指摘し、学校教育における国際人道法学習教材の活用と普及に関する研究結果を発表しました。

群馬県高崎市教育委員会の飯野眞幸教育長による講演では、「いじめ問題」と学校のリスクマネジメントのエキスパートの立場から、いじめ防止のために必要な視点や取り組み事例が示されました。いじめを未然に防止することの重要性に触れ、高崎市教育委員会で作成した「学校におけるいじめ防止プログラム」について紹介。いじめ防止のポスター作製や

テーマ学習、校内研修、PTAによるいじめ防止セミナーなど年間を通した活動があり、SNSでのいじめ防止の取り組みやいじめ防止推進本部の設置など、具体的な取り組みについての解説がありました。最後に、いじめ問題への取り組みにおいて、「命の大切さ」「思いやり」「自主性とリーダーシップ」を育む青少年赤十字の活動を取り入れることが有効だと語りました。



◎いじめ防止プログラム年間計画	
〈年度当初〉学校の強い決意の表明/いじめ防止ポスターの作成・掲示	
〈4月～5月〉	適応指導の充実/教育相談/いじめに関わるテーマ学習/いじめ防止に向けた校内研修
〈6月～7月〉	特別活動の充実/いじめ防止週間/テーマ学習(夏季休業中) リーダー研修会やピア・サポート研修会 PTAによるいじめ防止セミナー
〈9月～夏季休業明け〉	休業明け適応指導/テーマ学習(10月～12月) 特別活動の充実/国際人道法と連携したいじめ防止週間/テーマ学習
〈冬季休業中〉	三宅園芸/リーダー研修会やピア・サポート研修会
〈1月～3月〉	休業明け適応指導/悩み相談/学校評価の検証

機関紙 「いじめ防止」など

青少年赤十字では、さまざまな発行物などを通じて、「いじめ防止」に関するメッセージを伝えてきました。ここではその一部を紹介します。



青少年赤十字機関紙(小学校)
497号(平成19年3月30日)
ぼくたち、わたしたちに
できることがきっとあるはず



青少年赤十字機関紙(小学校)
503号(平成20年8月20日)
角度を変えて街をよく見てみましょう



青少年赤十字機関紙(中・高合併号)
498号(平成19年3月30日)
いのちを考える ICRCのEHLから



青少年赤十字機関紙(中・高合併号)
510号(平成22年3月1日)
ひとつの決断が何を変えたのだろう

事例02 福島県立平工業高等学校 生徒会（福島県）

“やさしいところ”から始まったコロナ対策 中学校へ衝立寄贈

福島県立平工業高等学校では、生徒会が中心となり、新型コロナウイルス感染症対策の飛沫防止等を自主的に企画・運営し、生徒が快適に学校生活を送れるための取り組みを行いました。

これは、コロナ禍で学校が長期間休校となり、遅れた学習を取り戻すために同校の図書館を活用して欲しいという思いから、生徒たちが自主的に始めたものです。飛沫防止のための衝立を製作して図書館に設置し、さらに近隣の中学校にも衝立を寄贈しました。また、「君が守れば、コロナに勝てる」というスローガンを考案し、横断幕を作って感染防止の啓発を進め、校舎内の除菌活動を実施しました。

また、ボランティアを行う他校との交流も積極的に行っています。愛媛県の高校で、間伐材を利用して楽器のカホン（ペルー発祥の箱型の打楽器）を製作していることを知り、22台のカホンを製作しました。今後、このカホンを使った演奏会を開催する予定です。



事例03 和歌山県立熊野高等学校 熊野サポーターズリーダー部（和歌山県）

～人道教育の一環～“すべての命を救いたい”という願いから開発されたAEDシート

和歌山県立熊野高等学校 熊野サポーターズリーダー部は人道教育の一環として、自動体外式除細動器（AED）を使う際、救護の様子が周囲に見えないよう上半身を隠す「AEDシート」を作成しました。上富田町内でAEDを配置しているうち69カ所へのシートの配布活動と取扱説明書を寄贈しました。

この活動は、2011年の紀伊半島大水害で被災したことを教訓に生かそうと始められたものです。2年前に「すべての命を救うプロジェクト」を立ち上げ、町内のAED設置施設のマップ作りや心臓蘇生術の啓発活動を行う中で、部員らは「女子生徒には胸などの露出を気にしてAEDが使われにくい傾向にある」ことを知りました。緊急の際にどうしたら抵抗感なくAEDを使えるのかについて検討し、患者の姿が周囲に見えないようにする「AEDハートフルシート」の開発を始めました。全国各地で反響があり、静岡県医師からは「浜松市で

中学生に心肺蘇生術の講習会を24年行っており、女子のAED使用率がまだ3割も満たないことを危惧していた。全国に広げてほしい」と連絡がありました。また長野県のオリンピック組織委員会関係者からも、「イスラム教徒の選手に必要なので送付してほしい」という要望があり、寄贈しました。



事例04 大分・別府地区 高等学校青少年赤十字メンバー（大分県）

高齢者に手紙で想いを届ける「赤十字愛の手紙」～思いやりのところから～

大分県の大分・別府地区高等学校青少年赤十字メンバーは、一人暮らしをしている高齢者に少しでも温かい気持ちでお正月を迎えていただくために、手紙を贈る取り組みを行いました。

生徒らは例年、年末になると、もちつきを行って一人暮らしの高齢者にお届けする行事を続けていました。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大の影響によりこの活動が中止となったため、ほかの活動ができないかと考えた末、手紙で思いを伝えるというアイデアに至りました。

それぞれの生徒が校内で書いた手紙を日本赤十字社大分県支部の担当者に渡し、地区の民生委員の方に配布していただきました。配られた手紙は206通、高校生メンバーの参加

数は118名という大規模での活動となりました。

高齢者の方へ直接手紙を渡すことまではできませんでしたが、手紙を読まれた方からお礼の返事が届くなどの交流もあり、それぞれの想いをしっかりと伝えることができた活動となりました。



道徳教育と青少年赤十字の関わり

やさしいところをみつけよう

～特別な教科「道徳」と青少年赤十字の関わり～

「道徳」は、小・中学校における教育課程の中に組み込まれている教科の一つです。新学習指導要領で「特別な教科」となった道徳の目的は、道徳的判断力、心情、実践意欲と態度を育てることであり、これはまさに青少年赤十字の態度目標「気づき」「考え」「実行する」と一致するものです。青少年赤十字の導入が、道徳授業にさまざまな面で応用できる点について紹介します。

また、とくに「防災」に関しては、児童・生徒が知識と行動力を身につけ自らのいのちを守ること、そして他者への思いやり、やさしさやいのちの大切さを学びとる力といった道徳心を育むための指導を行っています。こうした防災道徳の事例についても紹介します。

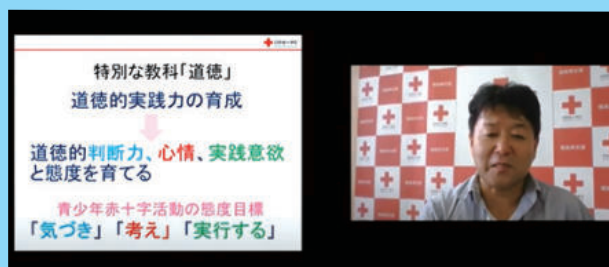
青少年赤十字の考え方や教材と特別な教科「道徳」との結びつき

日本赤十字社本社は2021年6月5日、令和3年度青少年赤十字リーダーシップ・トレーニング・センター指導者養成講習会「青少年赤十字活動と道徳指導～JRC教材を活用して～」をオンラインで開催し、全国から教職員や学校関係者が参加しました。

前いわき市立菊田小学校長の松本光司先生による講義は、青少年赤十字教材を活用した道徳指導について理解を深め、青少年赤十字活動で子どもたちの優しさや思いやりの心を育て「いじめのない社会」の実現に向けた取り組みを考えることが狙いです。

初めに参加者が抱える課題について質問した後、青少年赤十字防災教育プログラムを使った道徳指導の活用案について

の紹介がありました。教材使用やアクティビティを行った児童・生徒が気づきをえたのち、どのようなテーマを持った授業を行うとよいのかとの松本先生の問いかけに対し、「協力」「友情」「より良い学校生活の充実」といった意見がありました。



ご活用ください！

青少年赤十字の教材「まもるいのち ひろめるぼうさい」を活用した道徳指導例①

「まもるいのち ひろめるぼうさい」には、道徳の授業で使われることを前提とした指導案・ワークシートが収録されています。ここで紹介するのは作文教材「ありがとう」です。

手紙には、被災地の児童がたった一人で地震の大きな揺れから体を守っている時の恐ろしさ、家族や親戚の手助けでいのちが守られたこと、大切な家族を失った悲しみが綴られています。まわりの人々に支えられて生きている自分の生命の尊さを知り、力強く生き抜こうとする心を育むことを狙いとした授業です。まず資料を読んで感想を発表し、話し合いの方向を掴んでもらうようにします。

その後、「わたし」の行動や気持ちについて考えさせ、自分のいのちを大切にすることはということなのか話し合います。最後に、狙いに沿った総括を教師が行います。



表紙



指導案のワークシートを収録

青少年赤十字の教材「まもるいのち ひろめるぼうさい」を活用した道徳指導例②

グループワーク教材「防災コミュニケーションワークショップ」も、「まもるいのち ひろめるぼうさい」に収録されています。「BCW 竹ひごタワー」は、数人がチームとなり、竹ひご、マスキングテープ、紙粘土を使ってタワーを作り、ボール（紙粘土）のてっぺんの高さを競う活動です。

災害時、予想もできないことが次々にかかる状況の中では、「意見を出し合える関係をつくること」「協力すること」「状況を冷静にとらえること」「判断して決定していくこと」が大切です。この活動には、コミュニケーションによって生まれる能力を引き出す狙いがあります。単に運ぶスピードの速さやアイデアの優劣をチームで競うことが目的ではなく、大切なのはプロセス（過程）だということを気付かせるワークショップです。



BCW 竹ひごタワー

「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう」で「病気」「不安」「差別」を学ぶ道徳指導例③

コロナ禍においてよりよく生きようとする大切さを理解し、健康に生活できる喜びや、周囲の人への気づきや感謝する気持ちを養うことを狙いとした授業です。

まず、なぜマスクをつけているか考え、学習シートに意見を書き込みます。そして、「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう」を読み、「病気」と「不安」があることを確認します。そのうえで、第3の顔「差別」について考えます。さらにこの「差別」を封じ込めるために何ができるのかを考えていきます。学習シートにメモを書き込むとともに2～3人に発表してもらいます。



(2020年4月作成)

教材はこちらから
ダウンロードできます

■「まもるいのち ひろめるぼうさい」<https://www.jrc.or.jp/volunteer-and-youth/youth/document/>
■「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう」https://www.jrc.or.jp/saigai/news/200326_006124.html

事例 地域一体となり、避難所生活体験を通じた防災道徳意識の醸成（福井県支部）

近年、自然災害が頻発し、防災教育のニーズが高まっています。青少年赤十字では、人のいのちを大切にするという「人道」の観点からこれまでにさまざまな形で防災教育に取り組んできました。地域に根差した防災への取り組みとして、日本赤十字社福井県支部では、地域の加盟校と連携し、防災教育の実践を進めています。

坂井市教育委員会は、自然災害に備える知識と経験を習得し、防災学習や避難所生活の体験を通して協調性や自主性、自立性を育てる「防災合宿」を地域と連携し開催しています。2020年度から実施されているこの取り組みは、子どもたちと地域の結びつきを強くしながら、地域コミュニティ構築を図るとともに、未来を担う子どもたちを育むことを目的としたもので、今年度は市内の4つの小学校で開催しました。

坂井市立明章小学校では、2021年6月25日に、6年生児童

21人が防災合宿に参加しました。子どもたちは、嶺北丸岡消防署による応急担架作りや起震車で震度7を体験したほか、夕食では災害時の食事体験として、坂井市赤十字奉仕団丸岡分団とともに高密度ポリエチレンの袋（ハイゼックス）を使ってカレーライスを調理しました。

体育館に自分たちで組み立てたダンボールベッドで宿泊した子どもたちは、「災害の恐ろしさを学べてよかった」、「少ない水でハイゼックスを使ってカレーが作れることが分かった」と話し、普段は恵まれた環境で生活ができていることに感謝していました。子どもたち、地域のボランティア、そして行政が一体となって災害時に自助と共助のスキルを学びつつ、地域全体を思いやる道徳心をはぐくんでいます。



青少年赤十字のオンライン活動

毎年全国で行われる対面での会議、研修など青少年赤十字活動の多くは新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、2021年においては制限付きでの実施となりました。

しかし、青少年赤十字の活動はさまざまな形で継続されています。オンラインを活用し、工夫を凝らしたいくつかの支部の活動を紹介します。



01 福島県支部 オンラインでもフィールドワークができると確信！

福島県の高等学校指導者協議会は7月10日(土)、県の青少年赤十字リーダーシップ・トレーニングセンター(以下、トレセン)を2年ぶりに開催し、10校17名の生徒が参加しました。午前中は救急法、非常時に向けた炊き出しのための実施訓練演習や、赤十字概論の講話を行い、午後はフィールドワークを行いました。

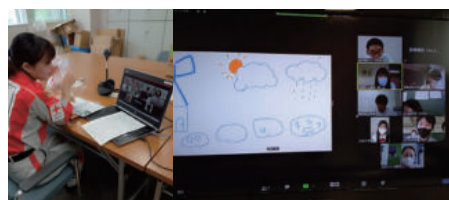
救急法ではペットボトルを利用した心肺蘇生を学びました。炊き出し演習は、事前に参加者へ送付したハイゼックス炊飯袋を活用して、実際にお米と水を入れて空気を抜くまでの作業を実践しました。

午後のフィールドワークでは、ブレイクアウトルーム機能を活用し、各ホームルームにスタッフが訪問し関門をクリアしていくという形式で実施しました。ホワイトボード機能を活用し、1つの画面を皆で共有しながら、皆で協力して絵を完成させるなど、オンラインだからこそ楽

しめる工夫が多くあり、HRの仲間と協力して積極的に活動することができました。

指導者の先生方からは「この体験が大切。リモートでも繋がることで楽しむことができた」「高校生の感受性の豊かさを感じた」等、誰でも気軽に参加できるオンラインの良さを感じることができたトレセンでした。

その後、非常時を想定し、学校でハイゼックス炊飯を実践し試食を行ったり、自分たちで救急法のビデオを作成して文化祭で発表するなど活動が広がりました。



02 埼玉県支部 香港赤十字とオンラインで国際交流！ ～コロナ禍でのストレス解消法を語り合う～

埼玉県支部は8月28日(土)、中国紅十字会香港支部(香港赤十字)との国際交流を開催しました。

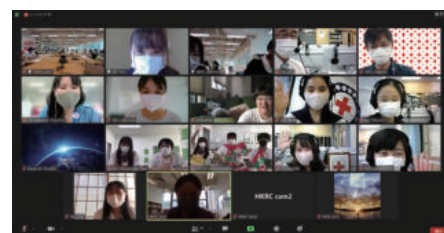
香港赤十字ユースから15名、埼玉県支部高校生青少年赤十字メンバーから12名が参加したこのプログラムでは、「コロナ禍で新しい生活様式が求められるなか、友人と外で遊べなくなるとストレスを感じ、体に不調が現れる」という声があったことから、ストレスに対処する方法やメンタルヘルス、セルフケアの促進などについて話し合い、それぞれが行っているストレスの解消法について意見交換しました。香港側からはヨガやストレッチ、埼玉側からは十分な睡眠やYouTubeの視聴等が有効だと異なる意見や方法が寄せられ、文化や高校生活の違いなどの相互理解を深めることができました。

参加者からは、「看護科に通っているので、香港赤十字のコロナ対応のお話がとても有意義だった」「香港の人たちの文化を感じることができました」という感想がありました。また、オンラインでの国際

交流については、「コロナ禍でも工夫次第でできることがあると感じました」「画面を通して交流できるから直接会えなくてもさびしくありません」というように、制約のある環境下での気づきがあったようです。

今回は香港赤十字側がホストを務めましたが、埼玉県メンバーからは、「主催者側の経験も積んでみたいです」という積極的な意見がありました。

国際理解・親善を深めるために、オンラインの活用も含めた工夫をして、活動を引き続き行っています。



03 富山県支部 ワークシート活用でオンラインでも活発かつ円滑な議論！ ～「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！」の講義～

富山県支部は8月3日(火)、高校生を対象とした青少年赤十字高等学校リーダーシップ・トレーニング・センター(以下、トレセン)を、開催しました。「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！」と題した講義のあと、人道や3つの顔教材についての支部作成のオリジナルのワークシートを用いてグループ討議を行いました。県内の青少年赤十字加盟校4校から参加した生徒たち28名と5名の指導者が4つのHRに分かれて、活発な意見が交わされました。講義を受けて、参加者からは「自分の中には第1の敵、利己心があると気づき、自分の行動で何が起こるか想像して、広い視野を持ち、人のこ

とを思いやることのできる人間になりたい」といった声がありました。指導者の先生からも良い反応が多く得られました。

メンバー同士でより深く長く続く関係性を築くため、来年は対面とオンラインでのハイブリッドのトレセンを実践していく予定です。



04 東京都支部

3校種のオンラインチャレンジ！

～小学生向け「家族で！赤十字防災デー」と中高生向けJRCイベントを開催～

東京都支部は7月31日(土)、小学生と保護者を対象とした「家族で！赤十字防災デー」を開催しました。都内にある青少年赤十字加盟校の小学5、6年生と保護者の6組が参加し、家族で体験できる非常用トイレの解説や、災害時シミュレーション、赤十字や災害についての学習を行いました。

また、8月16日(月)～18日(水)の期間、中学生を対象とした「JRCリーダーシップ・チャレンジ」を、8月3日(火)～5日(木)の3日間、高校生対象の「JRCワークショップ×チャレンジ」を、それぞれオンラインで行いました。

中学生向けのプログラムでは、他校のメンバーとコミュニケーションを取りながら、リーダーシップの学習や新型コロナウイルス感染症についての理解を促しました。

高校生向けプログラムでは、三日間を通して一人ひとりが身近な課

題を発見し解決に取り組むワークショップを企画しました。三カ月かけて学校内や個人で実行まで取り組み、10月30日(土)に互いの成果を発表し合いました。

高校生のワークショップ×チャレンジは達成感が90%と参加者から高い評価がありました。「社会や身の回りの状況に興味を持つようになる」「自分にできることが何かを考えるようになった」と答えた人は約7～8割もいました。青少年赤十字メンバーが身の回りの社会課題に「気づき」、自分にできることは何かを「考え」、実際に「実行」に移すサポートを、オンラインであっても続けています。



05 広島県支部

自分で☆みんなで☆JRCアクションプランDAY 「自分でできるJRC」の講義や救急法を学ぶ日



広島県支部は、小学生を対象にした青少年赤十字広島県リーダーシップ・トレーニング・センターを、8月4日(水)に開催しました。県内の青少年赤十字加盟校から23名の児童が参加し、「自分でできるJRC」の講義や救急法についての実演等を行いました。

それぞれの学校では、指導者の先生の他、操作補助を行う先生が数名参加されましたが、児童は普段からタブレットやヘッドセットを使っているため取り扱いに慣れており、レクリエーションなどでは和やかな雰囲気での進行、積極的に発言する児童が見られました。参加者からはアンケート調査で、93%の児童から「トレセンの参加を自分の兄弟や友達にすすめたい」との回答がありました。また100%の児童から「これからも気づき、考え、実行する生活を続けていきたい」との回答があり、効果が実感できる結果となりました。



初めてのオンライン開催ということもあり、児童・指導者共々最初は不安と緊張の面持ちでしたが、プログラムを通し各児童の積極的な参加姿勢によって、学校・学年・場所を超えて絆が生まれ、最後には一人ひとりがリーダーシップについての理解を深めました。

06 本社

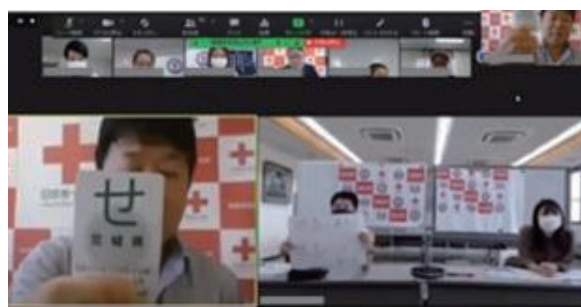
児童生徒だけでなく先生も！青少年赤十字のトレセンの指導者が オンラインでつながり、学び、工夫する講習会

日本赤十字社本社は6月5日(土)、令和3年度青少年赤十字リーダーシップ・トレーニング・センター指導者養成講習会を開催しました。

青少年赤十字活動の指導を行う先生50名が参加した今回の講習会では、宿泊型の研修で「気づき・考え・実行する」機会が意図的に組まれた特徴的な事業であるリーダーシップ・トレーニング・センター(トレセン)の意義や教育効果についての紹介や話し合いが行われました。

松本光司先生によるトレセンの基礎を学ぶ講義では、トレセンで育むリーダーシップについて解説しました。青少年赤十字におけるリーダーとは、「一人ひとりがリーダーであり、全員がリーダーシップを持ち協力して目標達成できる子どもたちの育成を目指すこと」等で、トレセンを通じてこれらを養うことができると紹介し、先見の重要性についても説明されました。

また、ホワイトボード機能を使って参加者が同時に1つの絵に書き込みながら行うグループワークや、全国都道府県の「かるた」を使ってランダムに参加者へ質問を投げかけ全国各地の取り組みが垣間見られる場面があるなど、オンラインだからこそ楽しめる活動も行いました。



参加した先生方からは、「先見の位置づけは青少年赤十字に限らず色々な場所で必要」、「コロナがあり普段以上に多忙な学級では、いつも指示をしてしまっていたことに気が付いた。自発的な行動を促すため、待ちの姿勢が大切なことを学んだ」という感想があがりました。

講習会は伝統あるトレセンの理解を深める講義を行いつつも、オンライン上でも青少年赤十字活動を継続するための工夫についてグループに分かれて意見を交わしました。青少年赤十字を支える指導者の先生方がつながり、互いに学び合いました。

教育現場で使える 青少年赤十字教材

青少年赤十字では、児童・生徒への指導の際に活用できるさまざまな教材を作成しています。教育現場で活用していただきたい教材や資料を青少年赤十字担当職員が紹介します。ぜひ、学校教育活動の新しい取り組みの指針としてご利用ください。

全般

せきじゅうじって、なんだろう？

アンリー・デュナンにより始まった赤十字について、読みやすく紹介した入門書

せきじゅうじって、なんだろう？ 53円



小学校低学年以下を対象とした、赤十字の起源や活動、目標などを、わかりやすく紹介した入門書です！

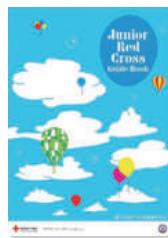


全般

青少年赤十字指導者手引き

青少年赤十字活動に関わる先生に向けて、活動の趣旨や運営の仕方について理解を深めるための手引き

指導者手引き 262円



迷ったときにはまず「青少年赤十字指導者手引き」を確認！赤十字や青少年赤十字の要素が詰まった1冊です。



国際理解・親善

青少年赤十字国際交流ガイドブック

青少年赤十字代表団として外国を訪問するときや、海外の青少年赤十字メンバーを紹介するときのガイドブック

青少年赤十字国際交流ガイドブック 209円



青少年赤十字では海外の赤十字社の仲間たちとの交流や異文化への理解を通じて国際性豊かな青少年を育成すること目指しています。本書では国際交流を行う事前準備や、有意義なプログラムにするための心構えなどを学ぶことができます。

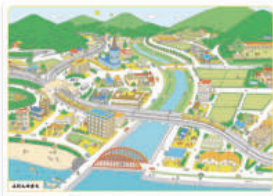


健康・安全

ぼうさいまちがいさがしけんはっけん！教材

幼稚園・保育所の子どもたちと、災害時の危険(場所・行動)について学び、自分の身を守る基礎的な知識や判断力を身に付けてもらうための教材

※WEBからご購入いただけます。



幼稚園、保育所の子どもたちが自分のいのちを守る防災の知識を学べる教材です。かわいい絵柄で、クラスでも、個人でも、おうちでご家族ともご利用いただけます。



これらの教材は日本赤十字社のホームページからダウンロードいただけます。

ほかにも使える教材が多数あります。ぜひご利用ください。 <https://www.jrc.or.jp/volunteer-and-youth/youth/document/>

青少年赤十字担当職員がオススメの教材を紹介



宮崎さん



朝井さん



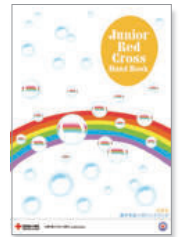
藤井さん

全般

青少年赤十字ハンドブック(小・中・高)

青少年赤十字メンバーである児童・生徒向けの活動ガイドブックシリーズ

- 小学生用 136円
- 中学生用 178円
- 高校生用 252円



JRCメンバーの必読書です。歴史や青少年赤十字で大切にしていることへの理解が深まります。どこから活動をはじめたらよいか？と迷ったときに読んでいただくと、具体的な活動がわかります。ガイドを読んで気づき、考えたら、すぐ実行してみてください。

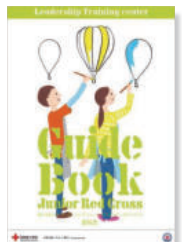


奉仕

青少年赤十字リーダーシップ・トレーニング・センター・ガイドブック

青少年赤十字活動の中核となる、児童・生徒リーダー養成のためのプログラムのガイドブックシリーズ

- 指導者用(B5判 36ページ) 105円
- 小学生用(B5判 24ページ) 53円
- 中学生用(B5判 44ページ) 105円
- 高校生用(B5判 44ページ) 84円



青少年赤十字リーダーシップ・トレーニング・センターの全てが詰まった1冊です。研修前や研修中にもご利用いただけます。



健康・安全

青少年赤十字防災教育プログラム『まもるいのち ひろめるぼうさい』(小・中・高生)

自然災害に向き合ってきた日赤と現場の教員が提案する「授業ですぐ使える防災教材」をまとめた一冊 ※非売品



“未来の被災者”を救い、自然災害によって悲しい思いをする人が一人でも少なくなることへの想いが込められた防災教材です。



全般

人道的価値観をはぐくむ 国際人道法学習プログラム 誰もが人間らしく生きるために

人間の尊厳を守り、紛争のもとたす必要のない犠牲や損害を防止することを目的とした「国際人道法」を学ぶための教材

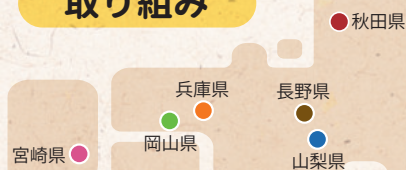


単元ごとに展開案や例題、解説などがわかりやすく書かれていますのでそのまま授業などで使うことができます。



日本縦断活動紹介

各ブロックの 取り組み



全国の青少年赤十字(JRC)加盟校の中から、最新の取り組みをご紹介します。JRCを積極的に活用し、児童・生徒の温かな心を育てている6つの取り組みをヒントに、日ごろのJRC活動や学校生活をますます充実させていきましょう！



秋田県立金足農業高等学校 (秋田県) JRC部

WAROCKで繋がろう

JRC部 部長 八栴 幸羽さん

テーマ 地域交流・高齢者交流

「WAROCK(ワロック)」とは、アクリル絵の具やボスカで石に絵を描き、公園など町のいろんな場所に置いたり隠したりして、誰かに拾ってもらい「人と繋がる」活動です。

高齢者施設の方から声をかけていただき、WAROCKの活動を知りました。コロナ禍で直接人とふれあえない中、石で交流できる活動は楽しそうだと思います。参加しました。

絵を描く石はさまざまなので、その形を生かしたデザインを考えるのが難しかったです。高校生らしい自由な発想で描くことができました。

コロナ禍により活動が制限されている中でもできることがあると知り、自信を持つことができました。完成したのを見て施設の方が笑顔になってくれたことが嬉しくて、参加してよかったと思いました。



WAROCKに
思いを込めて



笑顔で喜んで
くれました！



甲州市立松里中学校 (山梨県)

生徒会

1円×105人＝世界の仲間の命を救う

松里の誇り～桔露柿に込められた思いを受け継ぐ～

雨宮 友久 教諭 生徒会会長 田口 幸斗さん

テーマ 地域交流・募金活動

「自分たちが誰かのためにできること」をテーマに、生徒会本部とJRC委員会が中心となり、毎月第3水曜の『ボランティアデー』の日に、1円玉募金を行なっています。

全校JRCの授業の中で、世界には、家族を支えるために学校に行かず働かなければならなかったり、兵士として戦場に駆り出されたりする同世代の仲間がいることを知りました。そうした仲間のために自分たちにできることは何かを考え、この活動を始めました。

この活動を継続して行うには、全校生徒の意識改革が必要でした。募金がどのように役立てられているかが伝わっていないことに気付いた生徒会本部・JRC委員会は、学園祭で「1円玉募金のゆくえ」をテーマにして活動の意義や事例を発信しました。これにより、参加率が上がり充実感と達成感のある活動となりました。

また、毎年11月には職場体験・地域交流の一環として、晩秋の松里の風物詩でもある「桔露柿」づくりの手伝いをしています。

「桔露柿」は、学区の伝統的な特産品です。しかし、高齢化や作業量の多さのために担い手が少なくなっていることを地域学習の際に知りました。そこで、まず認知度を上げるため、甲州市主催の生涯学習発表会で地域産業の魅力と伝統を守ることの大切さをテーマとした発表を行いました。

農家でのお手伝いを通して、生徒たちは地域の温かさとともに、伝統文化の中で育ってきたことを実感しました。また、受け入れてくださった農家の方々からも、「活気が出た」「孫というみたいで楽しかった」と高い評価を受けています。

このように本校のJRC活動では、「気づき、考え、実行する」のサイクルを大切にしています。課題意識を持ち、共に考え、取り組んでいくことで、活動のさらなる活性化を目指していきます。



「桔露柿づくり」
体験



集まった募金を
日本赤十字社
山梨県支部へ届ける



佐久市立田口小学校 (長野県)

指導者

赤十字の母「大給恒」ゆかりの学校

佐久市立田口小学校 砥石 順一 校長

テーマ 地域理解・奉仕

本校は、佐久市の南部にある龍岡城五稜郭の中に建つ小学校です。龍岡城五稜郭は江戸時代末期に藩主・松平乗謨によって築城されたもので、松平乗謨は維新後に大給恒と名乗り、日本赤十字社の設立に尽力した人物です。

こうしたこともあり、本校では学年に応じて青少年赤十字活動を積極的に取り入れています。児童は「学校探検」を手始めに、日本赤十字社の設立までの歴史を系統的に6年間で学びます。これは「五稜郭学習プログラム」と呼ばれるもので、郷土に愛着や誇りを持ち、郷土のよさを発信できる子どもの育成を目的に、15年ほど前から行なっています。生活基盤である地域の特徴を知るために、子どもたちが実際に見て、触りながら調査し活動を進めるスタイルですので、先生方も指導方法には試行錯誤しています。

また、史跡である「御台所」を気持ちよく見学していただくため、五稜郭クリーン大作戦と呼ばれる清掃やボランティア活動

を続けています。こうした活動を通して、人のために役立つことに喜びを感じ、人のために「気づき・考え・実行する」ことのできる心優しい子どもたちが育ってくれることを願っています。



毎月「御台所」を子どもたちが心を込めて清掃しています
(五稜郭クリーン大作戦)



五稜郭学習を進めてきた子どもたちによる全校集会での発表の様子



兵庫県立柏原高等学校 (兵庫県)

指導者

JRC活動として車いすマップ作り

インターアクト部顧問 久保 哲成 教諭

テーマ 奉仕・地域交流

本校が所在する兵庫県丹波市柏原町は旧織田藩の城下町です。小さくて静かな観光地なので、車いすユーザーの人にもゆったりとした気持ちで訪ねていただける街です。柏原町で街歩きを楽しんでもらえるようにと、インターアクト部の部員がJRC活動の一環として数年前から街歩き用の車いすマップを作成しています。

車いすマップ作成のきっかけはこのような経験からでした。以前、障がい者団体がこの町に観光へ来られ、当部が車いすを押すボランティアをした経験がありました。その後、車いすを利用する生徒が当部へ入部し、部員の皆が彼と一緒に活動できることはないかと考えたとき、市内観光した際に不便に感じたことを思い出し、車いすマップの作成を行いました。

その後も、車いすマップの改訂・更新を毎年行っています。3年生を中心とした部員たちが街に出て、車いすの乗り手と押し手

を交代しながら調査を行います。この体験から、車いすを利用する方の気持ちを理解できるようになりました。相手の立場に立つてその思いを自ら体験するという貴重な学びとなっています。

車いす利用者の
目線で観光スポットを
巡ってみる



スロープがあると高低差のある施設も大変利用しやすい



指導者

社会福祉法人宮川福祉会とみやまこども園・
とみやまこども園こども赤十字クラブ（岡山県）

子ども自身が命を守るために… 幼児期でもできるよ！仲間と共に！

とみやまこども園 山本 直子 園長

テーマ 防災教育

とみやまこども園では、毎年春になると子ども赤十字登録入団式を実施し、青少年赤十字の活動を積極的に行っています。

2020年、日本赤十字社岡山県支部から、幼稚園・保育所向け防災教材「ぼうさいまちがいさがし きけんはっけん！」が届きました。教室の様子が描かれた図が本園の部屋と似ていたこともあり、子どもの理解が深まると考え、教材として活用をはじめました。それまでも避難訓練を毎月実施していたので、子どもたちも避難の仕方は身についていました。しかし、大人がいない場面で、的確に判断し自分の身を守ることの大切さを言葉だけで伝えることは難しいとも感じていました。

その後コロナ禍となり、防災活動についても制約がある中での取り組みとなりましたが、まずは身近な場所や人との関わりから

防災について見直そうと考え、教材を使った防災教育を続けました。すると、子どもたちの様子に変化がみられるようになってきました。自分のことはもちろん、お友達や小さな子にも優しく伝え合う姿を目にして、この取り組みの効果を実感しています。今後も、思いやりを持って人と関わることを青少年赤十字の活動を通じて行っていきます。



入団式で支部職員が
ネパールの水事情に
ついて語る様子



危険な場所や
避難の仕方
について学ぶ

※「ぼうさいまちがいさがし きけんはっけん！」は
日本赤十字社のウェブサイトからダウンロードできます。



指導者

都城市立姫城中学校 姫ボラ（宮崎県）

「サークル虹」と姫ボラの交流について

廣山 佳子 教諭

テーマ 障害者福祉

姫ボラでは、難病・精神障がい者支援啓発のためのピラ配りや募金活動を行うとともに、障がいのある方と一緒にレクリエーションを行うといった交流会を続けています。

十数年前、本校の生徒一人が参加したことがきっかけで、年3回の交流会に参加するようになりました。スイカ割りや七夕飾り製作、団子を作って試食するといったイベントで、毎年10~20人程の生徒が交流しています。2年前からコロナ禍となり直接触れ合う交流ができなくなっていますが、学

校でつくった七夕飾りのほか、入院されている方への励ましの手紙、塗り絵や多肉植物を用意し、スタッフの方に届けてもらいました。生徒たちが笑顔で活動している様子が見られ、自信と誇りをもって活動していることがとても素晴らしいと感じています。

青少年赤十字活動を通じた学びとしては、SDGsを意識した活動に取り組んでいます。障がいのある方への偏見や差別をなくすこと、思いやりの心を育てることにつながっています。



昼休み時間に姫ボラスタッフが七夕飾りを製作している様子



青少年赤十字で"紡いだ夢 ネパールで"見つけた夢"

平成30年度「青少年赤十字海外支援事業ネパールスタディーツアー」に参加し、現在新潟大学の農学部で海外の農業支援に携わるために学んでいる青少年赤十字の先輩からメッセージをいただきました。

おかだ ゆか
新潟大学農学部2年 岡田 柚佳さん

ボランティアへの思いと海外への興味

私は中学生の時に多くの人に支えていただいたことがあります。高校生になって、今度は自分が誰かを支えるためにボランティア活動に関わりたくと考え、高校のJRCサークルに参加しました。献血を通して日本赤十字社の活動に興味を持っていたことも参加動機の一つです。JRCサークルでは募金活動や芋煮会などご当地のイベント、さらに学童との交流などの活動に関わりながら、「ボランティアとは?」「人を支えることとは?」と自分なりに考えを深めていきました。

サークルに参加した時、先輩から日本赤十字社が実施している海外スタディーツアーに参加した時のお話を聞きました。「とてもいい経験だった」と目を輝かせて話す先輩の笑顔が忘れられず、私も高校2年の時に「ネパールスタディーツアー」に参加したいと思い、必死で参加応募の書類を書きました。私にとって初めての海外への旅でした。



いつも温かく、優しくったネパールの人々

ヒマラヤ山脈に囲まれた標高1400mの盆地にあるネパールの首都カトマンズに降り立った時に感じた強い日差しのことは今でも忘れられません。ホテルに移動するバスから見た道路には自動車よりバスやバイクが多く走っていました。砂ぼこりが舞い上がっているために歩いている人々はカラフルなマスクをつけていて、日本とは異なる都市風景がとても新鮮でした。

ネパール赤十字社のスタッフや訪れた学校で出会った生徒たちもみんなとても親切で、暖かく私たちを迎えてくれました。人々は両手を合わせ、相手の目をしっかり見て笑顔で「ナマステ」とあいさつしてくれて、人があいさつし合うことの大切さや嬉しさを実感することができました。辛い物が好きな私には豆のスープやスパイスカレーなどネパールの食文化もたいへん魅力的に感じ、今もしばしば自分で作って食べています。



一番左端が岡田柚佳さん。JRCメンバーの仲間とネパールのJRCメンバーと交流する

ネパールの農業のためにできることは?

一方でスタディーツアーを通してネパールの貧困、衛生状態や交通状況の悪さを目の当たりにしました。そして私たち日本人の常識は、必ずしも世界の常識ではないことを、海外に行くことで痛感させられました。

ネパールは穀物類を中心とした農業国ですが、未だにかなり旧式な方法で農業が営まれています。平地も少ないため限られた穀物類しか育てられないという話を聞き、日本の先進的な農業技術を導入すれば、もっと多様で豊かな農業に発展させることができるのではないかと思います。「自分がその手助けをできないだろうか?」。その思いは帰国後も変わらず、大学の農学部に進学を決めました。

農業のインフラ整備や自然保護について専門的に学び、将来はネパールのような国の農業の発展に貢献する仕事がしたいと思っています。そのためにあまり得意ではなかった英語の勉強にも力を入れており、大学の国際系サークルで各国での活動経験を持つ青年海外協力隊の人々とも交流しています。



青少年赤十字メンバーの皆さんへメッセージ/ 海外への好奇心と夢を忘れずにチャレンジを!

2020年からの新型コロナウイルスの感染拡大により、海外に出かけることが難しい日々が続いていますが、皆さんには海外に向ける好奇心や夢を決めてあきらめてほしくないと思います。今は実際に渡航できなくても、オンラインなどで海外の人々と気軽につながり、コミュニケーションをとるチャンスはたくさんあります。いつの日か海外に旅立つというモチベーションをキープしながら、渡航する国の知識や語学など怠りなく準備をしておいてください。

大丈夫、きっとあなたの夢はかないます!



〈青少年赤十字(Junior Red Cross)とは〉

はじまり



子どもたちの「気づき」をきっかけに

第一次世界大戦のとき、カナダ、アメリカ、オーストラリア、イタリアの学校の生徒と先生は、戦争で苦しむヨーロッパの人々をなぐさめ励ますため、手紙や包帯、被服、慰問品などを赤十字を通じて届けました。これがきっかけとなり、青少年赤十字(JRC)が誕生しました。

人道的な価値観を世界の子どもたちへ

赤十字の精神に基づき、世界の平和と人類の福祉に貢献できる人間に成長してほしいという願いから、赤十字社連盟(現在の国際赤十字・赤新月社連盟)は青少年赤十字を創設することを決めました。日本の青少年赤十字は、1922年に滋賀県の守山尋常高等小学校(現在の守山市立守山小学校)で「少年赤十字」として誕生しました。JRCはそれから脈々と活動を続け、2022年に100周年を迎えました。

JRCが大切にしていること



JRCの加盟・活用の
メリット



赤十字を教材に、「生きる力」を育てる

JRCの活動は、子どもたちの思考力(気づき)・判断力(考え)・表現力(実行する)を養うとともに、コミュニケーション能力や言語活動の充実を期待できます。

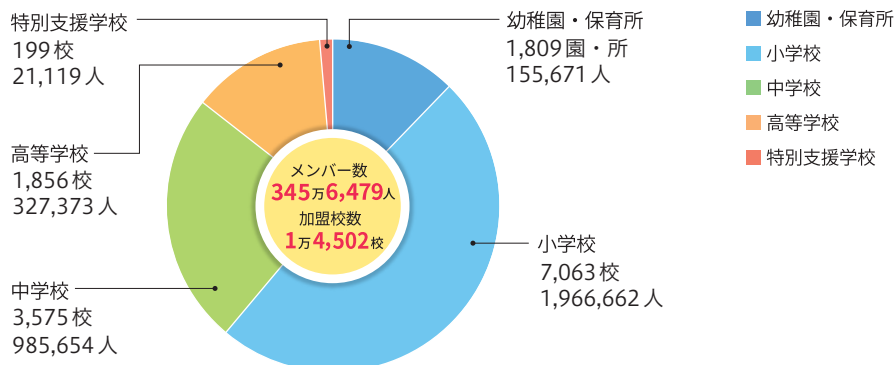
赤十字には、人間の命と健康、尊厳を守るために世界中で活動する中で得た経験やネットワークなどがあります。赤十字そのものを「教材」として、存分にご活用ください。

加盟校数 **1万 4,502校**

メンバー数 **345万 6,479人**

加盟校数・メンバー数ともに令和3年3月現在

JRC加盟校数・メンバー数
(令和3年3月末現在)



※この3年間で約15万人増加しています。

青少年赤十字指導情報 No.170

Junior Red Cross Information 2022

資料で見る青少年赤十字

[https://www.jrc.or.jp/
volunteer-and-youth/youth/document/](https://www.jrc.or.jp/volunteer-and-youth/youth/document/)



青少年赤十字創設100周年

[https://www.jrc.or.jp/
volunteer-and-youth/youth/news/
information/jrc100th.html](https://www.jrc.or.jp/volunteer-and-youth/youth/news/information/jrc100th.html)



※この指導情報は株式会社ゆで太郎システムによる「ゆで太郎夢基金」からのご寄付の一部が充てられています。

日本赤十字社 東京都港区芝大門1丁目1番3号

TEL. 03-3437-7083 FAX. 03-3432-5507 <http://www.jrc.or.jp/>